

黄檗山萬福寺の隠元隆琦倚像について

楠井隆志（九州国立博物館）

黄檗山萬福寺開山堂に安置される隠元隆琦倚像は、寛文三年(1663)に中国人渡来仏師・范道生(1635～70)によって造立された黄檗宗宗祖・隠元隆琦(1592～1673)の寿像である。江戸時代における頂相彫刻の基準的作例といえるが、これまで詳しく調査されたことがなかった。このたび調査する機会に恵まれたので、本発表では本像の概要を報告し、その特異性を指摘したい。

內衣、法服、袈裟を着け、両足を踏み下ろし沓を履いて倚坐する。本像以降、黄檗宗の頂相彫刻はすべて倚像である。頭髮には毛を貼り付け、口髭、顎鬚には植毛する。植毛の作例は京都・真珠庵一休宗純像が著名であるが、遺例はきわめて少ない。

材は環孔材の堅木で、黄褐色を帯びる。像の完成を祝う諸法子孫僧の詩偈には「西域木」（チーク材）をもって彫成されたとある。構造については、像表面の彩色が厚いため不明な点が多い。X線透過撮影画像を参照すれば、頭軀幹部は一材から彫成し、頭部は面相部を矧いでいる。面相部を別材で矧ぐのは、京都・泉湧寺観音菩薩坐像など日本に伝来する南宋時代・江南地方の彫像に通じるものがある。軀部は、軀幹部に両側面材を蟻継ぎで接合しているようである。内削りを施すが、棚板や横棧などは確認されず、江南地方木彫像の特徴といえる箱組み式構造ではない。

その面貌は、額や目元に多くの小皺を刻み、両眼が強くカーブし、口角を上げている。頭髮や口髭、顎鬚の植毛とともに隠元の老相と温容が写實的に表現されている。造像にあたり范道生は画像を基にせずとも直接隠元を拝することが可能であり、対看写照に基づくものとみてよい。一方、着衣の表現は形式的で、范道生の他作例にも等しく見出されるパターン化された衣襷を刻んでいる。

本像の竣工を祝う諸法子孫は、「法像」「聖胎」といった言葉を用いて称讃している。黄檗派にとって初の頂相彫刻になる本像は、もちろん、隠元の老齢と将来の退隱をおもんばかっていたの造像だったであろうが、萬福寺開創と黄檗派開立の祝祭、他派への誇示の意味合いも込められたと思われる。倚像ながら像高 155.5cm（坐高 106.0cm）と異様に大きい寿像が造立された意味は、こうしたところに求められよう。

范道生は福建省泉州府出身で、万治三年(1660)長崎に渡来し、唐寺の造像に従事した。寛文二年萬福寺の命を受け、長崎で観音（白衣観音）等の諸像を造立、翌年萬福寺に招致され、約一年間で弥勒大士（布袋）、十八羅漢を造立した。范道生が萬福寺に登って最初に手掛けた本像は、日本彫刻史上にその名を残す端緒となった記念碑的作品といえる。本像を明末清初期における頂相彫刻の一遺品とみる視点も、今後の頂相彫刻研究において重要となるだろう。